
身代わりの人形

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身代わりの人形

【Nコード】

N8861H

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

古美術商の私が、怪しい代物を購入した話。

私は、しがない古美術商である。

今日は、古物商許可が下りている、正規のオークションに参加していた。

出産を控えた妻に、何かしらの土産でも買っていてやろうと考えたのだ。

だが特にめばしい品はなく、巻物を一つ、50万で落札して終わってしまった。

その帰り道、変な男に話しかけられた。

「その道行く旦那、お待ち下さい」

「なんだ、お前は」

「私は前々から、その巻物を狙っていた者です。今日は、どうにかその品を譲っては頂けないかと思ひまして、会場から出てくるのを見張っておりました」

「そんなに欲しかったのなら、何故オークションに参加しなかった？」

「恥ずかしながら、古物の認証を持っていません。ですので、私は開催されている場所にすら入れない始末です」

「事情は分かった。とは言っても、私も大枚を叩いて落札した品だ」

「勿論、存じております。ですので、落札された金額に少々色を付けて、というのはどうでしょうか？」

私は商売の虫が疼いた。

元よりこのような巻物には興味が無く、右から左に動かして金を集めるのが仕事である。

この様子ならもう少し値段をつり上げられるだろうと考え、嘘の話を作る事にした。

「お前の言い分は理解した。しかし此方もこのような品が欲しいと、人づてに頼まれたものでな。簡単に譲るわけにはいかないよ」

「この様な品、でしたら他にもあるではないですか。私は、その巻物が欲しいのです。なんとかお頼み出来ませんか？」

私が悩んでいるフリをしていたら、男が分かりましたと声を上げた。

「では、80万プラス、この身代わりの人形と交換でどうでしょうか」

金額を聞いて内心喜ぶも、私は渋い顔をした。

「身代わりの人形だと？ 胡散臭い」

「いやいや、これは神木が使われた本物です。本来、降り掛かるであろう不幸を、この人形が肩代わりしてくれるのですよ。ご家族の

安全のために、一つどうですか」

家族、それは今の私には心引かれる言葉であった。

元よりオマケの品であるし、どう計算しても損にはならない。

私は男と交換し、木彫りの人形を持って妻がいる病院に向かったのである。

「何処へ行かれていたのですか、奥様の陣痛が始まっておりますよ」
病院に辿り着くと、私を出迎えたのは鬼の形相をした看護師だった。

急いで分娩室に通される。

すると、ベッドの上に青い顔をした妻が寝ていた。

「アナタ、来てくれたの」

私は妻の手を握りしめた。

「当たり前だろ。私達は夫婦じゃないか」

「ごめんなさい。でも、今まで色々あったから、いざとなったら来ないと思っていたの……」

「確かに。だが過去は過去だ。これからの事、子供の事を一緒に考えていこうじゃないか。これは、その証だよ」

私は、身代わりの人形を、妻の右手に渡した。

その時。

妻が動物のような悲鳴を上げ、体を動かし始めたのである。

白かった顔が鉛のように変色し、苦悶くもんに絶える表情になっていた。

明らかに普通の陣痛とは違っていたので、私はもうすぐ生まれるのだと思った。

だが周囲を取り囲んでいた看護師達は慌てふためき出したのだ。

「心拍、血圧共に高すぎます。奥さん、落ち着いて深呼吸して下さい。今のままでは子供まで危険になりますよ」

看護師の叫びも、妻の耳には届いていない。

他の人達も忙しそうに、点滴やらマッサージを繰り返している。

私は顔面から血の気が引き、何も出来ず呆気に取られていた。

「旦那さん、ボーッとしてないで奥さんに話しかけて！ 最悪の場合、二人とも死んでしまうかもしれませんよ」

私は婦長さんらしき人に叱咤しったされ、飛び跳ねるように妻の元に駆け寄った。

頬に涙が滴るのも気にせず、彼女の右手を握りしめた。

「大丈夫か、お前」

だが、妻は獣のように荒い呼吸を繰り返している。

「……頼むから、私を1人にしないでくれ。子供の顔が見たいから、生き残ってくれ。もう浮気はしない。近所の人妻にも手を出さない。出産後も、黙ってれば風俗やキャバクラぐらいは良いかと思ったが、それだつて止める。だから、死なないでくれ」

私は妻の右手を、握りしめた。

その時。

力が強すぎて、木彫りの人形の尖った一部が、妻の手に食い込んだようだ。

反射的にバツと手が放される。

「そんなに握つたら痛いでしょ、このダメ亭主がつ！」

妻は顔を赤らめて怒り、人形を私に向かって投げつけたのだ。

人形は私に命中し、血を吹き出して床に倒れ込んでしまった。

その姿を見て妻はスッキリしたらしく、顔色が元に戻っていた。

看護師達も脈と呼吸が正常になったと、喜びの声を上げている。

そして無事、出産も終わったようである。

私は、薄れゆく意識の中。

あの人形に感謝しつつ、気絶したのであった。

（後書き）

「真実の仮面」という作品と同軸のお話です。よろしければ、そちらもどっぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8861h/>

身代わりの人形

2010年10月14日04時26分発行